

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

晃司がまだ大学生だったときの話である。彼には、学問の研究者としても、一人の人間としても尊敬してやまない先生がいた。ある日、その先生から「一緒に大峯山に行きませんか」との誘いがあった。数年来登山から遠ざかっていた晃司は、急にワクワクした心持ちになり、遠足を告げられた子供であるかのように、ニコニコと（ a ）におよんだ。

大峯山とは、奈良県の南方に位置する吉野山から紀伊半島の南側に連なる千メートル級の山をいう。遠く古代から修験道の中心山地として栄え、現代でも数多くの山伏たちがこの山を登り、さまざまな修行に勤しんでいる。こうした修行を目的として入山することを「峰入」というが、晃司は、大峯山がその峰入の代表的山地だということをすっかり忘れていた。

登り始めて何分、いや何時間たつただろうか、すでに時間の感覚は失われていた。昨夜、宿で早目の夕食をとっていたときに、二人は地図を拡げて今日の行程を確認した。一口に大峯山といっても、千メートル級の山々が縦横に展開している。その中でも、二人が今回の目標としているのは、一七一九メートルの高さをほこる山上ヶ岳にある大峯山寺である。そこにたどり着くには、表と裏の二つの行場を通らなければならない。二人が登りはじめた西側の洞川道と、もう一方の北側の吉野道が合流する洞辻茶屋から大峯山寺までの前半の登山路が「表行場」に当たる。その行場をこえて後半の登山道を東側に迂回するともう一つの「裏行場」が出現する。そこを經由して大峯山寺に出ることも可能だが、二人は時間の都合上、裏行場へは回らず、表行場をまっすぐ進むルートで直接大峯山寺へと向かうことにした。

A とは、いままで三度、大峯山に登ったことのある先生の言葉である。晃司は、先生の経験を聴いていると、それらに出くわすのが何だか楽しみに思えてならなかった。というのも、先生は、その難敵がいかに人間の身をすくめるもので、それをどう自分が乗り越えてきたかを、晃司の笑いを取りながら聴かせてくれたからである。（ b ）、晃司にとつての今日の登山とは、たとえ難関がそびえ立っていることがわかって

先生が登り終わり、いよいよ晃司の番が回って来た。下にはもう幾人かの列ができていて、「この足がもしすべったら……。鎖をつかむこの手が離れてしまったら……」。晃司の頭をよぎるのは（ d ）の話ばかりで、しかも後ろ向きのものであり、毛穴から汗が一気にふき出した。そして、身体から血の気がすつと引いていくのを、晃司はありありと感じていた。C、先生の声の上から降ってくるが、晃司には下を見るのはもちろん、先生の方をおおきく見る余裕もない。このとき、晃司は、はじめて「自力」ということばの強さと弱さを知った。この状況を打破するには「他力」など当てる仕様が無い。助かるのも自分の力、助からないのも自分の力だ。後ろはふり返ってないが、晃司には順を待つ列がさらにのびていることがわかっていった。下からの無言の重圧が、晃司の背を押しも、引つ張りもした。

最後の足掛け——いや、「足賭け」と変換しても何ら違いはない——の場を決め、思い切って全体重をそこに掛けて、最後の鎖を一気にたぐり寄せた。（ e ）岩場から頭が飛び出たところで、岩上の景色が目に見えこんできた。すると、いやにまぶしい陽の光が、晃司の体の表面からすっぽりと内側に入りこんできた。安心感のある体温だった。大きく長く、二度三度と晃司の口から息がもれてきた。鐘掛け岩の上では、鼓動の高鳴りをおさえようと、他の修行者たちが休んでいた。晃司には、彼を待っている先生が自分を見て、ほくそえんだように見えた。心の内が筒抜けになっているような気がして、晃司は苦笑いで応じた。しかし、気恥ずかしさとは別に、理性の働かないところでは、身体全体を充実感が駆けめぐっていた。それは、晃司がかつて経験したことのない感動であった。

ふと視線を上げると、再びオオヤマレンゲの一群が目に見えこんできた。今度は晃司自身で見つけた。さつきより少々たおやかな風情をかもしだしているように映る。さつきはそれを一方的に「見た」という感覚だったが、今回は「出会った」という感じが、晃司にははじめていた。風にゆれうなずく大きな花弁が、何かをささやいているかのようだった。

そういえば、『百人一首』の中に、平安時代中期の山伏であった行尊が詠んだ和歌があった。あれは確か、この大峯山中で孤独に修行にはげん

いても、畏怖と向き合うというより、興味をもって積極的に体験したくなる、心躍らせる対象だったのだ。遊園地のジェットコースターやお化け屋敷の存在意義を、晃司はこの峰入に見出していたのである。先生の語る峰入は、実にたのしく、そして（ c ）。

前を行く先生の足あとを見失わないよう、晃司の視線は常に先生の足をとらえて離さなかった。時々休憩をして急に視線を持ち上げてみると、老眼鏡をかけたかのように、手前に奥にと、いびつな大自然が歩き来し出した。目がそのゆがみに親しんでくると、かなたには、ようやく輪郭をあらわにした切れ長を思わせる尾根が見えてきた。それは想像していた以上に長く続いていた。

B との先生の声に、晃司はまたどつてきた道に目をやった。すると、オオヤマレンゲの群れが、せまい山道一面に、風を受けずに淡々とたたずんでいた。その大きな花弁の白さは、まぎれもなく、「純白」としての「白」であった。今までその群れの真下を知らずにくぐってきたとは、ずいぶん地面とにらめっこしていたのだなと、晃司は我ながらおかしくなった。入山してはじめて笑みがわき出てきた。

ほどなく、最初の難敵が現れた。「油こぼし」である。すべりやすい大きな一枚岩を鎖一本で切り切る修行場である。杖を持つている者はみな、先に登った者へ杖を手渡ししたり、あるいは投げ渡しを囀るなど、両手を使える状態にした。普段からバスケットボールできた晃司は、腕の力も強く、足腰もしっかりしていたので、苦しまずしてあっさり登ることが出来た。「修行というより、アスレチックの遊戯みたいで面白いや。普通に山道を登るより、こういう方がスリルがあつて楽しいや。」と思つた矢先に、晃司を待っていたのは次なる「鐘掛け岩」であった。

巨大な岩場を鎖によって登っていくというのは先の油こぼしと同じだが、油こぼしがななめ上に登っていくのに対し、こちらは真上に垂直に登る感じである。左右の足の運びを一步間違えば、たちまち立ち往生、まったく身動きができなくなる。それは、決められたピースを決められた場所に確実に置いていく、パズルゲームのようであった。

一人、また一人と、挑戦者たちが時間をかけて順によじ登っていく。

でいた行尊が、健気にさく桜に呼びかけた歌ではなかったか。オオヤマレンゲを見つめながら、晃司は一人、そう考えていた。

D すっかり足が岩頭にくっついてしまった晃司を待っていたのは、先生から発せられた、覚えのある響きであった。晃司にとつて、昨夜の先生との話の中で最も興味があったのが、峰入最大の荒行であるらしい「西の覗き」だった。頭の後ろで両手を組み、両肩をロープ一本でくくられて、足首をつかまれたまま、九十度の岩頭から逆さづりにされるという、現代世界においておおよそ信じられない究極の修行行為である。岩頭から下は、約百メートル下の谷底まで大気しか存在しない。へその辺りまで岩頭から突き出されるため、自分の力ではもうもどつて来られない。生還も墜落も、これまたどちらの選択権も本人が有することはない。

晃司の前でいま挑戦しているのは、年端の行かぬ子どもであった。ちょうど校庭の鉄棒の上で、上半身をダラーンと前のめりにしたような状態である。何がためにこの子はこのような危険を冒しているのだろうか。晃司には、目の前で起きてくる現象が、不思議でたまらなかった。その子を横目に、晃司は心の準備に取り掛かろうとしたが、先生はその行を見合わせるという。今まで三度行なっているから、というのがその理由だ。

晃司は、昨夜の先生の談話がふと浮かんだ。先生がこの覗きの行において、三回とも異なる感想を持ったという話である。一回目ははじめてということ、かつて味わったことのないおそろしさに身をふるわせた。二回目は、一度経験したことがあるという自信から、自ら膝近くまで岩頭から突き出て、「エビ反り」をして見せた。そして三回目、あらためて冷静に岩頭から谷底を見下ろしたとき、エビ反りになった自分の無鉄砲ぶりに驚愕し、自分のおろかさを知るに至った。その瞬間、背筋が凍り、猛烈な恐怖におそわれたという。

急に晃司の番となった。山伏姿の行者は、有無を言わず、晃司の肩にロープを通し、うつ伏せにさせた。そこから晃司は、ワニのごとく、じわりじわりと奇岩の上を前へ前へとはいひ出さなければならなかった。徐々に眼下が開けてくる。遠くはるか谷底には青嶺がはつきりと見えた。まるで

緊急避難時に用意される分厚いクッションであるかのようだった。「まだ前に出ろ、まだ行ける！」全身の血がいつぱんに頭部に引き寄せられていき、頭がすくぶる重い。こめかみは、右と左がつながりかけていた。晃司の運命は、背後でロープを持つている、見ず知らずの山伏の男にゆだねられている。このとき、晃司をおおうすべてが他力本願であった。唯一許されるのは、祈ることだけだった。

「さつき、『鐘掛け岩』で自力の絶対性を思い知ったばかりなのに……」冷静に考えると、そんな思いが浮かんできそうなのだが、そんな（f）現状把握など、今の晃司にできるはずがない。なぜにこの試練が与えられたのか、晃司にはわからなかった。たまたま先生に連れて来られたからという消極的な理由にしては、罰が重すぎやしないか。

すると、山伏が、さらに前へ突き出そうと、晃司の足首を強くにぎって押し出してきた。身体がさらにすり落ち、たった数センチの差だが、自分が確かに谷底に近付いたのを晃司は即座に感じていた。そして、顔の見えない山伏からの質問責めがはじまった。

「お父さん、お母さんを大切にするか」「はい！」

「悪いことしないか！」「はい！」

「商売繁盛に精をだすか！」「はい！」

晃司は、矢継ぎ早に浴びせられる質問に、できるかぎりの速さで答えた。こんなに裏返ったさげ声は、自分自身聞いたことがない。学生の晃司は、無論商売などしていない。だから「商売繁盛」のことを問われても、本来は否定しなければならぬ。自分は商人ではない。しかし、「真実」は今さらどうでもよい。大切なのは今の瞬間を乗りこえられるかどうかという「事実」だけだ。時間にしてたった十秒くらいだったのかもしれない。晃司の覗きの行は許しを得られ、ようやく引き上げられた。ロープから解放された晃司は、地になじまぬ足取りで先生の傍にもどった。しばしの間、頑丈な巨石にその浮遊する心身をもたせ掛けていた。

このとき、彼ははじめて死を覚悟した。今まで浮き沈みなく、平平平凡と生きてきた晃司は、死と直面した経験がまったくなかった。もちろん、親せきや知人の死は、葬式を通して経験している。この人にはもう二度と

をかかえられ、こう言われた。

「転がっていろいろは餓鬼にとりつかれたってことだよ。この辺りはね

餓鬼が多いところだから、気を付けた方がいいよ。」

なるほど、晃司の脳裏にゴールがちらついてきたところで足を取られてしまった。餓鬼とは隙を好む生き物だ、と泥を払い落としながら晃司はそう解釈した。

ややあつて妙賞門が見えてきた。門をくぐると、ほどなく大峯山寺本道前の広場に出た。すでに法要は始まっていた。見渡すかぎり、右も左も男でうめつくされている。ここ大峯山は、登山道に入る手前の清浄大橋の地から女人禁界がほどこされている。かつては全国にいくつもあった女人禁制の山も、現在ではここだけである。愛する女性を想うことも修行のさまたげになるといふことなのだろうか。目の前の光景に、晃司は男子校時代の入学式が重なって見えた。それまで共学校を進んできた晃司は、体育館で行われた入学式で、男だけの式典をはじめ経験した。いいとか悪いとかそのような感想は特に持たなかったが、隔靴搔痒の感に似た、不自然さと新鮮さをまぜ合わせたような印象がずいぶんしたものだ。久しぶりにその感覚がよみがえって来た。

法要の途中、広場の中心から外側に向けて、高々と破魔矢が放たれた。その周辺にいた人たちは一斉に駆け寄り、その矢をうばい合っていた。由緒は知らないが、どうやら縁起物らしいことは晃司にも察せられた。違う方向にまた矢が放たれた。三本目が放たれようとしたとき、それまでの二本の方向から推測した方へと、晃司は走り出していた。矢は、駆ける晃司を軽々と追いついていった。だが、晃司より先に矢をつかんだものはいなかった。犬がぐわえたボールを飼い主のもとに走り届けるように、晃司は先生のもとに駆けもどり、そして破魔矢を渡した。先生は今までに見せたことのない、しわだらけの笑顔でそれを受け取った。

今その破魔矢は、蔵書のしきつめられた先生の研究室で、神棚のような待遇を受け、窓際の高みに安置されている。社会人となった晃司は年に数度、用事があつて先生の研究室を訪れるが、その度に、破魔矢の存在を確認して帰るのであつた。

会えないのだという思いに（g）を濡らしたことは幾度もある。しかし、さつき晃司が岩鼻から身を乗り出して見下ろしていたのは、我が身に降りかかった死への道である。晃司が後から先生に聞いた話だが、この修行を修験道では「捨身」の行為と見立てている。岩頭から奈落の底へつるされることによって、一度身を投げたことになり、再び引き上げられることによって仏として生き返ってくる、という考え方がそこにはある。要するに、仏に化身をとげての現世への再生なのである。そもそも、山岳修行とは、大ざっぱに言って、修験者が仏になること（即身即仏）を目的とする修行である。換言すれば、俗なる人が聖地である山岳で修行することによって、聖なる存在に変わることを目指すのである。

（h）捨身の行の後、晃司の中では明らかに今までは違ふ人生観が芽生えていた。今までとどう違うのか。それは晃司には言葉で説明できなかった。自分の表現力や語彙力のなさにもどかしさを感じてしまうが、しかし、どうも言葉において説明しきれぬものではない気が、晃司には強くしていた。言葉だとか表現だとか人間の力のおよぶ範疇を超越した、別次元の別世界的なもののように感じられてならなかったのである。

奇岩から離れると、いかつい不動明王の石像の前で、覗きの行を終えた人たちが、こう唱えていた。

「ありがたや西の覗きで懺悔して弥陀の浄土に入るぞうれしき」

生きて次に歩を進めるのは、まさに「ありがたや」であつた。この場所での歌を、実感を伴って口ずさんだ人たちが数多くいたことは、想像に難くない。その中の一人に自分が加わったことは、晃司にとつて、すなおに喜ばしいことであつた。ただ、自分ではない、もう一人の自分がそれを成してくれたような気持ちも心のEにあつた。

しばらく平坦な道が続く、晃司は、そろそろ目標とする大峯山寺のことを考えはじめていた。今年には修験道の開基とされる役小角の没後千三百年にあたり、今日は、当寺において「御遠忌法要」がとり行なわれることになっている。時間的にはそろそろ法要の始まる時間なのだが間に合うだろうか。と思つた瞬間、晃司は路肩に足を取られ、手から先に転倒した。幸い怪我も何もなく、ホッとため息をついたところ、後ろから来た山伏に肘

問一 文章中にある(a)～(h)にあてはまることはどれか、次の中から一つずつ選びなさい。

- a 1 耳を貸す 2 押し問答 3 否認なし
- b 4 二つ返事 5 首を縦
- b 1 まるで 2 つまり 3 こうして 4 そして 5 しかし
- c 1 高かった 2 怖かった 3 長かった
- c 4 愉快だった 5 満足だった

- d 1 夢 2 現実 3 結果 4 経験 5 仮定
- e 1 のつと 2 カツと 3 ざつと 4 ハツと 5 じつと
- f 1 劣等な 2 均等な 3 上等な 4 平等な 5 不平等な
- g 1 目 2 袖 3 服 4 鼻 5 涙
- h 1 確かに 2 さらに 3 なぜなら 4 すると 5 やはり

問二 A D にあてはまるセリフはそれぞれどれか、次の中から一つずつ選びなさい。

- 1 「ほら、あれがこの幻の名物だよ。」
- 2 「善は急げって言うことだよ。」
- 3 「行場にはいくつもの難敵が待ち構えているよ。」
- 4 「おつかれさん。次はいよいよ覗きだよ。」
- 5 「下を見ちゃいけないよ。」

問三 ——ア「ほくそえんだ」ような顔を先生がしたのはなぜか、正しいものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 弟子がようやく登り終えて、次の修行の場に進めるから。
- 2 難関を乗り越えてきた弟子を、笑顔でむかえてやりたかったから。
- 3 弟子より先に登れたことに、まだまだ自分が若いと自信を持てたから。
- 4 弟子が修行の楽しさを味わってくれて、自分も満足したから。
- 5 楽しさを期待した弟子が急に必死になり、一種のユーモアを感じたから。

問四 ——イにあてはまる和歌はどれか、次の中から一つ選びなさい。

- 1 もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし
- 2 いにしへの奈良の都の八重桜今日九重にほひぬるかな

- 3 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に  
4 人はいさ心も知らずふるさと花ぞ昔の香にほひける  
5 ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
- 問五 E にあてはめるのにもっともふさわしくないものを、次の中から一つ選びなさい。

- 1 一部 2 一隅 3 一角 4 一環 5 一端
- 問六 U の指し示す内容に近いことわざは次のどれか、次の中から一つ選びなさい。

- 1 鬼の居ぬ間に洗濯 2 油断大敵 3 生兵法は大怪我のもと  
4 足もとの明るいうち 5 転べば犬の糞
- 問七 晃司と先生の峰入の行程で正しいものはどれか、次の中から一つ選びなさい。

- 1 洞川道↓表行場↓洞辻茶屋↓妙覚門↓大峯山寺  
2 洞川道↓吉野道↓洞辻茶屋↓表行場↓妙覚門↓大峯山寺  
3 洞川道↓洞辻茶屋↓表行場↓裏行場↓妙覚門↓大峯山寺  
4 洞川道↓洞辻茶屋↓表行場↓妙覚門↓大峯山寺  
5 洞川道↓洞辻茶屋↓吉野道↓表行場↓妙覚門↓大峯山寺
- 問八 E 「破魔矢の存在」とは、いまの晃司にとって、どのようなものであるといえるか、正しいものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 災いを退ける神聖なもの。  
2 なかなか手に入らない貴重なもの。  
3 苦行に耐えたことを思い出させるもの。  
4 期待外れだった峰入の記憶を呼び起こすもの。  
5 先生が自分のことを覚えている証拠になるもの。
- 問九 次の1〜7のうち、この小説の内容として正しいものを二つ選びなさい。(順不同)

- 1 大峯山は昔から老若男女関係なく、山伏が登る修行の場である。  
2 先生は自分の峰入の経験談を事前に晃司に聴かせた。  
3 晃司は精神的に強くなりたかったので、峰入を自ら望んだ。

【三】 次の各問いに答えなさい。

問一 ある生徒が五人一組の剣道の団体戦メンバーに選ばれました。その結果の報告が次のア〜オです。それぞれ、どのような問いかけに対する発言でしょうか。もっともふさわしいものを、1〜5から選んで数字で答えなさい。同じ数字は一回しか使えません。

- ア「ぼくで勝ちました。」  
イ「ぼくなら勝ちました。」  
ウ「ぼくは勝ちました。」  
エ「ぼくも勝ちました。」  
オ「ぼくが勝ちました。」
- 1 「昨日の試合、彼は勝ったみたいだね。君は？」  
2 「昨日の試合、一人しか勝てなかったそうだけど、勝ったのはだれ？」  
3 「昨日の試合、チームとしての勝ちが決まったのはだれのところ？」  
4 「昨日の試合、勝った人も負けた人もいるみたいだけど、君、どうだった？」  
5 「昨日の試合、君は直前に怪我をして、代わりに出た選手が負けてしまったそうだね？」

問二 次のカ〜ケの問いかけに対する答えとしてみっともふさわしいものを、1〜4から選んで数字で答えなさい。同じ数字は一回しか使えません。

- カ「ひとつ残っていたおにぎり、食べたのはだれ？」  
キ「まだ食べていない人、いますか？」  
ク「彼はひとりで食べたのかな？」  
ケ「他の人はみんなもう食べたみたいだけど、君はもう食べた？」
- 1 「ぼくは食べました。」  
2 「ぼくも食べました。」  
3 「ぼくが食べました。」  
4 「ぼくと食べました。」

- 4 晃司は修行を乗り切るには自力こそがすべてだと最終的に思った。  
5 晃司は大峯山が思い描いていたとおりの楽しい山だと思った。  
6 晃司は修行の後にそれまでの人生観とは違うものを感じた。  
7 晃司はオオヤマレンゲと桜を見誤った。

【二】 次の空らんA〜Eに入るべき語句を、それぞれ1〜5から選び、番号で答えなさい。

問一 太宰治の命日にあたる六月十九日は、桜桃忌と呼ばれ、今もたくさんの人が太宰の墓を訪れる。二〇〇九年は、ちょうど彼の生誕百周年の年であった。彼の代表作として、(A)が有名である。

- 1 『坊っちゃん』 2 『杜子春』 3 『風の又三郎』  
4 『走れメロス』 5 『小僧の神様』
- 問二 一族の隆盛から、壇ノ浦での滅亡までを描いた(B)は、目の見えない琵琶法師による琵琶の弾き語りや伝えられた軍記物語で、那須与一の『扇の的』や『木曾の最後』などが有名である。

問三 推理小説の祖と呼ばれるエドガー・アラン・ポーの名前にちなんでペンネームとした作家、(C)は、少年探偵シリーズの作品で人気がある。

- 1 小泉八雲 2 二葉亭四迷 3 松本清張  
4 星新一 5 江戸川乱歩
- 問四 SF(サイエンス・フィクション)小説で有名なジューヌ・ヴェルヌの小説ではないものは、次に挙げる作品の中で、(D)である。

- 1 『タイムマシン』 2 『地底旅行』 3 『海底二万里』  
4 『十五少年漂流記』 5 『八十日間世界一周』
- 問五 戦国時代、上杉家に仕えた武将、直江兼統を主人公としてその生涯を描いた歴史小説は、(E)である。

- 1 『天地人』 2 『風林火山』 3 『功名が辻』  
4 『龍馬伝』 5 『燃えよ剣』

【四】 次の空らんA〜Eにあてはまる数字を1〜9から選んで数字で答えなさい。同じ数字は一回しか使えません。

- コ □里霧中  
サ 人を呪わば穴□つ  
シ □寸先は闇  
ス □牛の一毛  
セ 親の□光り  
ソ 石の上にも□年
- 1 一 2 二 3 三 4 四 5 五  
6 六 7 七 8 八 9 九

問一 慶應義塾が前身となる蘭学塾を築地鉄砲洲に開設したのは、元号の(A)年間である。

- 1 大正 2 明治 3 慶応 4 安政 5 昭和

問二 ユネスコが定める「世界無形文化遺産」に、日本からは「能楽」(B)、「歌舞伎」の三つの芸能が登録されている。

- 1 文楽 2 落語 3 狂言 4 雅楽 5 短歌
- 問三 現在、人々が多く利用する漢字を集めた指標である「(C)漢字表」に登録されている漢字の数を、約二百字追加することが文化審議会で検討されている。

- 1 一般 2 教育 3 常用 4 新出 5 当用
- 問四 今年は(D)年である。

- 1 甲寅 2 丙寅 3 戊寅 4 庚寅 5 壬寅  
1 厳寒 2 春暖 3 早春 4 春寒 5 新春
- 問五 手紙を書くときの二月の時候のあいさつは(E)の候である。

- 【五】——線のカタカナを、正しい漢字に直しなさい。
- ア ヨーロッパにユウガクする。イ フヘイを言う。  
 ウ アメリカとドウメイを結ぶ。エ 借楽園のバイリン。  
 オ 激しい練習にネを上げる。カ 諸国をレキホウする。  
 キ 機械をソウサする。ク 病はシヨウコウ状態にある。  
 ケ コツニクの争い。コ キユウジュツの稽古をする。  
 サ 国会トウベン。シ ジツカン十二支。  
 ス 意見をシユウヤクする。セ 枝がノホウズに伸びる。  
 ソ ジンジツの七草がゆ。

【六】 次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

俳句は、五、七、五の十七音という非常に短い詩ですから、気軽に作ってみることができません。中等部の授業でも屋上に出て俳句を作ることがありますが、全然出来なくて、<sup>A</sup>「コ」まっつている生徒はほとんどいません。

句作中の生徒からよく質問されるのは、字余り、字足らずのことです。私は、多少の字余りなら構わないと答えています。俳句は、五、七、五というリズムが大切なので、字余り、字足らずはあまり望ましくありません。特に、字足らずは、俳句らしいリズムが、<sup>B</sup>「イチジルしくくずれてしまします。けれども、字余りは許される場合もあります。ただし、五、七、五の「七」の部分の字余りは別です。ここを字余りにすると、俳句に「余り」がついているというより、全体のリズムをくずしてしまいます。ですから、「七」の部分に関しては、一音と数える「ん」「う」「ー」「一」、一音とは数えない「ゃ」「ゅ」「ょ」にも注意して、七音に、<sup>C</sup>「オ」さめるようアドバイスしています。

また、季語は必要か、何を使ったら良いかということもよくきかれます。俳句には、<sup>D</sup>季語が絶対に必要です。それどころか、どの季語を使うかがその俳句の、<sup>D</sup>カチを決めてしまうくらい重要です。そして、実は、季語には俳句を作るときのヒントがかくされています。

季語という言葉を当たり前のように使いましたが、季語には季題という呼び方があります。これは呼び方の問題で、<sup>E</sup>ツクシを春の季語と

も、春の季題といっても同じことです。では、季語も季題も全く同じかという、それはそうではありません。呼び方が違えば、そこに若干の違いがあるのです。季語を季節の言葉だと考えると、季題の方はどうなるでしょうか。季節の題となります。俳句を作るときに、季語、つまり季節の言葉を入れるという約束事があります。これを季題に置きかえてみると、俳句を作るときに季節の題を入れる、となります。これは、少しおかしな言い方です。題は、入れるものではなくて、付けるものです。例えば、運動会のことを書いた作文には、「運動会」と題を付けます。ですから、俳句には季節の題を付けるという方がしっくり来ると思えます。そして、これが俳句を作るときのヒントにもなります。

私は、俳句は季語を入れるのではなくて、季題を付けて作るのだと思っています。運動会の作文を書くときに、何について作文を書くか決めないで書き始める人はいないでしょう。同じように、俳句を作るときには、季題を決めてその季題のことを十七音の詩にうたうのです。これがわかれば、季語についてなやむことはありません。まず、自分が俳句にしたい季題を見つけてから、それを五、七、五にすれば良いからです。

今、皆さんは入学試験の最中です。どんな気持ちで試験を受けていますか。緊張していますか。少し平常心を取り戻して来ましたか。えんぴつを走らせる音は聞こえてきますか。試験監督の先生は優しくですか。俳句では、入学試験のような大きな試験を「大試験」と言います。これも、立派な季題です。皆さんの今の気持ちを五、七、五にしてみてください。

問一 ——線A～Eのカタカナを、正しい漢字に直しなさい。

問二 本文をよく読んで、「大試験」を季題に、俳句を作りなさい。解答

- ・ 大きな文字で書きなさい。
- ・ 漢字、ひらがな、カタカナをまぜて使ってもよい。
- ・ 必ずしもマス目をすべて使わなくてもよい。
- ・ 五、七、五の間はあけなくてよい。